



小山悦子、ステップスギャラリー三度目の個展である。例年に続き、大作から小品まで様々なタイプの作品を出品した。私もまた小山の作品に触れるようになって3年の月日が経つ。僭越だが、年々、作品の強度が増しているように感じる。

その強度とは、絵画としての強さである。絵画でありながらも絵画ではない要素に満ち溢れている。例えば具体的に形を描いている作品も、腕のストロークに任せて自由に線を辿る作品からも、音楽が聴こえてくるのだ。絵画は通常、見る者が視線を画面の表面に添わせていく。

ダンスの場合は、やってくるムーヴメントを受け止める。映画の際には、その中間ともいえる視点をを用いて解釈していこうとしているのであろう。しかし小山の今回の作品は、音楽のように、見る者の心の奥底を喚起していくのである。それは小説や演劇の場合と異なる。

小説は抽象的な場面に対し読む者が己の持つ心象風景を否定しながら、決して見たことのない世界を編み出す。演

劇の場合も同様で、簡素でも複雑でも、舞台芸術はあくまで発想の基点としながら、台詞から物語とそこに含まれる意味を読み取ろうとするのである。

小山の作品が非常に音楽的なのは、小山の作品に祈りが込められているのは前提であっても、その描くストロークが、良い意味で、何も描いていないところにあるのではないかと私は感じている。筆跡が確実にあるのにないように見えるのだ。

それは当然、小山が作品を描く意識が携えているのであろう。小山は線を引いたり塗ったりしているのではない。意識そのもので、直接描いているのではないだろうか。この点は更に考察しなければなるまい。来年の小山の個展で、私はそれが果たせるのか。作品は常に生きている。何時までも。

